

いせかいてんい れんあいぎたん

異世界種多恋愛奇譚

著：相山タツヤ

R18
ADULT ONLY
成人向け

俺の部屋に、
異世界から
少女が現れた。

ブラック社畜と
異世界赤ずきん





異世界転移恋愛奇譚シリーズ発売中作品紹介

現実社会は辛い事ばかりだから、異世界の少女と幸せになろう。



ヒロイン：
エイリス

「ブラック社畜と赤ずきん」

クーデレ少女に尽くされたい。

主人公の部屋に突然現れた赤ずきんの少女エイリスとの交流と愛情を描く第一作。ブラック企業勤めで毎日が辛い主人公が、クーデレ気味に尽くしてくれるエイリスとの交流と献身的なHによって、徐々に強い自我を取り戻していく物語が見所です。



睡眠姦/布団で初H/夜の電車でH
お風呂で貪欲フェラ/甘々ご奉仕H



ヒロイン：
メリル

「ゆるふわメイドと機関銃」

ゆるふわ天然メイドに癒されたい。

夜道で拾った異世界メイドとの交流を描くドタバタラブコメディ風の第二作。異世界でクビになったロリ巨乳メイドが、主人公の為に何とか役に立とうと大奮闘。人それぞれで良いじゃないとお互い慰め合いラブラブエッチに過ごすふんわり物語。



無邪気に手コキ/ご奉仕フェラ
ラブラブ初H/朝だけど二回戦



ヒロイン：
エイカ

「その淫魔は雨と共に」

エロいメンヘラと共依存したい。

雨が降りしきる夜の公園で出会った、妖しい黒ずきん少女との危険な愛欲を描く第三作。童貞で孤独な主人公がメンヘラ淫魔少女と流されるままに性交し、それから彼女なしでは生きられないと強い愛着を抱いていく共依存溺愛ダークラブストーリー。純愛です。



雨濡れ騎乗位で童貞喪失/甘々授乳手コキ
貪欲肉食エッチ/お尻で初エッチ



ヒロイン:

ローヤ

「吸血メイドのご奉仕生活」

高雅な吸血鬼メイドと夜通しHしたい。
夜道で助けた美女は異世界のメイドで吸血鬼
でしたという第四作。

出会いの場面が済んでからは、ひたすら攻守
交代しつつ夜通しセックスしっぱなしのエロ
さ大濃縮作品になっています。オススメ。

初めての吸精フェラ/ラブラブ中出し初H

パイズリご奉仕/騎乗位攻H/反撃種付プレス

気絶するまで絡み合い/朝勃ち性処理セックス

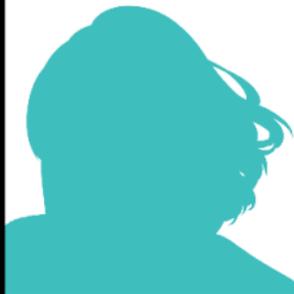


ヒロイン:

?

COMING SOON...

メイド要素を全面的に活かした
バブみ癒し系作品にしようと思っています。



ヒロイン:

?

COMING SOON...

食うか食われるかという感じの
ホラー系作品にしようかなと思っています。



目次：

第一章『ブラック社畜と異世界赤ずきん』

第二章『一緒の布団で』・・・36p

第三章『異世界の恋人』・・・62p

第四章『慰めの交わり』・・・88p

第五章『そして、永遠の恋人』・・・109p

あとがき・奥付・・・149p

登場人物

◆『俺』

本作の主人公。童貞で、交際経験も皆無。
絵に描いたようなブラック企業に勤めているが、
転職する踏ん切りができずにいる。

◆エイリス

本作のヒロインで、異世界の少女。
赤ずきん風の格好をしている。
ある事情により現世の主人公の
自室へ強制転移され、二人で
共に生活を送ることになる。



キャライラスト：懐良匱 様

SDキャライラスト：いという 様

第一章『ブラック社畜と異世界赤ずきん』

——駄目だ。寝られそうにない……。

布団の中で、俺は目をゆっくりと開いた。

枕元の目覚まし時計を確認すると、深夜の一時。

六時間後には、俺は再び会社という地獄へ出勤しなければならない。

目を閉じると、否応なしに鬱積した負の感情が次から次へと膨らんできて、胸を締め付けてくる。

毎晩いつも、朝なんて二度と来なければいいと考えている。

眠ったまま、静かに死んでしまいたいとすら思う。

朝が来るたびに俺は、人を道具としか思わない悪意に満ちた会社によって心身を削り落とされていく。

インターネット上で仕事の愚痴をこぼせば、そんなブラック企業は辞めてしまえというコメントが決まって返ってくるが、実際のところ、事態はそう単純には解決できない。

俺には特筆するような学歴も資格も能力もなく、より良い待遇が得られる転職が困難だから、生活の為にそんなブラック企業にも留まらざるを得ないのだ。

……俺、この先、どうなるんだろうな……。

無性に涙が湧いてくる。

擦り切れて壊れるその時まで、上級国民が肥える為の社会の歯車として酷使されるだけの日々。

限界を迎えたとしても、すぐに代わりの歯車となる人間が補填されて、まるで俺の存在など最初から無かったように、社会は平然と回っていくであろう。

こうして耐え忍んでいればいつかきつと報われる日が来るはずだという、何の根拠のない小さい希望に縋って生きていく他ない。

考えれば考えるほど不安と絶望が襲ってきて、俺は布団から身を起こす。

無理にでも睡眠をとらねば後の体調に響くのは間違いないのだが、それよりも、眠ることによって一瞬で朝を迎えてしまう感覚が恐ろしく思える。

ゲームでもやるか……。

アルコール度数の強い缶チューハイを飲みながら好きなゲームで遊んでいれば、朝が来るまでのリミットを少しでも延ばせる。

根本的に何の解決にもなっていないことは頭の底では分かっているが、こうして遣り繰りしないと俺の心は本当に壊れてしまう。

金も地位も名誉も友人も恋人もない俺は、こうして日常の辛さを自身で誤魔化しながら細々と生きていくしかないのだ。

布団を出て電気を点け、顔を洗うために洗面所へ向かおうとした時、突然、静電気が走ったように空気がピシッと張り詰めた。

「ん？ ……うわ——！！！」

刹那、部屋の中に眩い閃光が現れて炸裂し、驚きで腰が抜けた俺は悲鳴を上げながら壁際にへたり込む。

何が起こった。核ミサイルでも落ちたのか。

顔をかばって震えていると、やがて閃光が収束して、いつもの静寂が戻ってきた。どうやら俺は、まだ生きているらしい。核攻撃を受けたわけではなさそうだ。

顔を覆っていた腕をどけると、そこには見慣れたいつも通りの俺の自室があった。

——ひとつの異物を除いて。

布団の上を見て、俺は息を呑んだ。

まるで童話の赤ずきんのような恰好をした白い髪の少女が、仰向けに倒れているのだ。

「…………え？　嘘、だろ…………？」

光の中から少女が現れた。そうとしか形容できない。

俺は自分の頬をつねったり殴ったりしてみたが、しっかりと痛かった。夢を見てい

るわけではなさそうだ。

ついに過労で幻覚を見るようになったのか。それにしてもあまりにもリアルすぎる。

俺は恐る恐る近寄って、布団を占拠しているその少女の容姿を観察する。

まるで人形のような綺麗な子だと思った。

すやすやと寢息を立てているから、紛れもなく生きた人間だ。

年頃は十代後半くらいで、ショートボブの髪は美しい銀色の艶があった。

赤いずきんを被り、白いフリルつきのドレスと赤色のスカートを身に着けていて、赤の長靴を履いている。

姫。なんとなく、そんな第一印象を持った。

肌も服も汚れがいつさい無く、外界と隔絶された場所で大切に育てられてきたという、浮世離れた霧囲気がある。

だが俺は、少女が脇に身に着けているものを見て、視線を凍らせる。

最初は革製のハンドバッグかと勝手に思って流し見ていたが、よく観察すると違う。

これは、ホルスターだ。

そしてそこには、一挺の拳銃が収納されている。

……エアガンか……？

少女が起きる気配はない。

俺は、ホルスターを留めているストラップを慎重に外して、少女の質感には釣り合わないズシリとした鉄の塊を抜き取る。

嘘だろ……。

拳銃から弾倉を取り出してみると、そこには金属のドンダリのような弾薬が七発装填されている。

銃口を覗き見てみると、エアガンにはあるはずのBB弾発射用の内蔵銃身はなく、実銃と同じ螺旋状の溝が彫られた銃身があった。

この少女は、何者なのか。

血の気が引いた俺は、本能で、拳銃をゴミ箱に放り込んだ。

これから……どうすればいいんだ？

俺は体育座りの姿勢で、しばらく考え込む。

社会通念上では第一に警察へ連絡すべきとは思いますが、この状況をどうやって説明すべきか全く思いつかない。

ありのままを話しても、薬物の使用を疑われるだけでなく、少女を自室に誘拐監禁している犯罪者として見られてしまうかもしれない。

この状況では、警察だけでなく、誰にも頼ることはできない。

沈黙の静けさに包まれた夜の自室の中で、聞こえるのは眠り続ける少女の小さな吐息のみ。

次第に、やっぱり自分は夢を見ているのではないかという非現実的な感覚に陥ってきた。

俺の自室に、異世界から少女が転送されてくるなんて馬鹿な話が、本当にあったまるものか。

……夢の中くらい、俺は自由にしたっていいんじゃないか？

そんな考えが首をもたげてくる。

少女の身体を改めて眺めていると、妙な情欲が湧きたってくる。

寝息と共に微かに上下する少女の胸は、彼女の顔つきの幼さに見合わない豊かな膨みがあり、胸元が開かれたドレスからはその柔らかい谷間が覗き見えている。

視線を下へずらしていくと、滑らかで肉付きの良い太ももが目に入る。このままそつとスカートを持ち上げれば、彼女の下着まで見えてしまうだろう。

……ちよつとくらい……良いよな？ 俺の家に不法侵入してきたのは彼女だし……
そもそも、多分やっぱり夢だし。

すると俺の心の中で、天使と悪魔が小競り合いを始めた。

……いや、駄目だ。同意なく下着を覗くなんて人として最低だ。そこまで獣に成り果てたくない。

……そうやって夢の中ですらチャンスを逃し続けるんだな？ だからお前は今の今まで童貞なんだろ？

……どっ、童貞で何が悪いんだ？ 人間としての尊厳を共に捨てる必要があるなら、俺は一生童貞だっていい！

……そうか。お前と同世代の奴らはみんな童貞捨ててるのにな。何なら今ごろだつて汗だくパコパコしてる奴もいるかも。本当に、羨ましくないんだな？ 一生童貞のまま惨めにブラック企業に使い捨てられ死んでいくんだな？

………。

俺の中の天使は、何も言わずそこで息を引き取った。

こんなリアルな夢の中で童貞を捨てられるチャンス。そう思うと、俺の下腹部が強く疼き始める。

……よし、やるぞ！ やるぞ……！！ ……でも、どうすりゃ良いんだ。

童貞でキスの経験すらない。性知識なんてエロ漫画程度しかない。

……安全なところから、行くか。

俺が最初に選んだ手は、スカートめくり。

中坊並みに安直だが、実際こういう状況に陥ってエロ漫画のようにいきなり胸を揉んだりブツかけたりなんて出来るわけではない。

赤ずきんの少女は、相変わらず静かに寝息を立てている。

俺は息を殺し、彼女の赤いスカートを指先でつまむと、映画の爆弾処理シーンよりも慎重にそれを持ち上げていく。

少女の太ももの奥にあるその秘所が、徐々に晒されていく。

少女の体熱で少し温められた空気がふんわりと解放され、その先に見えたのは、白いレースのパンツ。

間近に生で対面した女性の下着。

鼻血は出なかったが、興奮で脳の小さい血管がいくつか弾け飛ぶような感覚があった。

俺はスカートをそつと戻して、身悶えする。

アダルトビデオは海外の無料動画サイトで見たことはあるが、リアルに直面するこの興奮とは比べ物にならない。

……これから、どうする？

選択肢がいくつも思い浮かぶが、肌に実際に触れるのは彼女が起きてしまう危険性

が高い。

しかし危険を乗り越えなければ、ただ女性のパンツを見て興奮する小学生男児と何ら変わりがない。

次に気になるのは、少女の大きな胸。

いきなり驚掴みは無謀だが、指一本で触れるくらいなら多分バレないだろう。

名も知らぬ赤ずきんの少女のふくよかな胸に、俺は人差し指を恐々と伸ばしていく。

ふにゅ、と柔らかく温かい感触。

頭に火が灯ったような興奮が巻き起こったと同時に、ふと違和感を覚えた。

もしブラジャーを着けているならば、もっとゴワツとした感触になるのではないか。

……まさか。

指を三本に増やして、そっと少女の柔らかい胸を撫でて感触を確かめる。

………やっぱり、ない。

この少女はあろうことか、ブラジャーを着けていない。

ということとは、このドレスの胸元を下げれば、ありのままの姿が露わになるということだ。

俺は再び、しばらく煩悶する。

………ということとは………。

少女はまだ眠り続けている。起きる気配は微塵もない。

とうとう俺は五本の指を少女の胸に乗せた。

静かに撫でるように探り、ついに胸の突起、少しかたい感触を探り当てる。

魔が差した俺は、その少女の胸の突起を、人差し指と親指で、きゅっ、と摘まんだ。

「……………んっ」

初めて少女が反応した。

俺は飛び退いて壁際に避難する。

だが少女は少し身体を揺り動かしただけで、再び寝息を立て始めた。

ドレス越したが、胸を触るだけでなく、彼女の乳首にも触れてしまった。

緊張と興奮が最高潮に達し、俺は酔ったような心境になった。

俺の頭は、『どこまでいけるか』という思考だけに全ての回路を消費していた。

俺は、少女の小さい唇に注目した。

それは唾液ですこし湿っており、先ほど身体を揺り動かしてからはずかにかに開かれている。

いきなりキスをする勇氣は流石になく、俺は人差し指をそこに向かって伸ばしている。

これは、指に彼女の唾液をつけてから自分の口で舐めれば間接キスになるという浅はかな思考からの行動だ。

だが、人差し指を唇につけた瞬間、予想外のことが起きた。

「……………あむ……………」

人差し指が、少女の唇の奥の湿った空間へと引き込まれた。

そしてであろうことか少女は、熱い舌で俺の指を甘く舐め始めた。

「……………んん……………ちゅば……………」

飴を舐める夢を見ているのか、それとも指しゃぶりの癖があるのか、俺の指を舐め続けている。

舌の生暖かい粘膜が俺の皮膚を刺激して、ぞくぞくとした未知の快感に襲われる。

もどかしい感触に耐え切れず、ねぶられていた指をぬるりと引き抜くと、少女の透明な雫が糸を引いて垂れ落ちた。

「……………はぁ……………」

少女は眠りながら、まだ指が名残惜しいという風に熱い吐息を吹いて、その湿った唇を半開きにして舌なめずりをする。

俺の下腹部は否応なしに硬くなっていて、いまにも達しそうなほど張り詰めていた。

……………指じゃなくて、『コレ』を入れたらどうなる？

今までは身体に触れる程度であったが、ついに完全に一線を越えた発想が浮かぶ。

これは夢……夢なんだ。

そう言い聞かせながら、おもむろに自分のトランクスを下げ、張り詰めた雄をさらけ出す。

一刻も早く彼女に射精したいという欲求に支配され、俺は中腰の姿勢で雄をしつかりと構えながら、眠り続ける少女の口元に近づけていく。

今までの人生の中で、最も緊張している瞬間だった。

まさしく、天国と地獄の境目に立っている心境。

人生で初めて生身の女性に向かって精を浴びせるという天国。

そして、もしこの少女が起きてしまえば、彼女はきっと俺を殺すだろうという地獄。

勃起した雄を少女の口元に突き付けて、ついに決心する。

……俺は、死んだって構わない。

そして俺はついに、その筒先を、彼女の唇に当てた。

「……………ちゅ……………」

唇が、最も敏感な先端にキスしたかと思うと、ぬるっと、熱く湿った奥へと誘い込まれた。

俺の雄が、この赤ずきんの少女の体内に、入った。

そう自覚した瞬間、俺の雄が限界を迎えた。

ついに彼女の口のナカへ、俺は勢いよく射精した。

人生で一番長い大量の射精。頭が真っ白になるほどの凄まじい快楽。
彼女の身体の中に直接、俺の遺伝子を注ぎ込んでいる。
人間の本能としての最上の悦びを感じ、全身が震えた。

最後のひと搾りの精液まで、彼女の口の中へと飲み込まれていった。

「……………ん……………んぐっ……………」

喉を詰まらせたような少女の呻き声で、急に我に返る。

……………まずい。

寝ている間に、精液のように臭いがきつくドロドロした液体を口に流し込まれれば、

誰だってえずくに決まってる。

俺は咄嗟にトランクスを上げて最低限の身繕いをするが、出した精液は消し去れるわけもなく、あたふたしながら殺される覚悟を決める。

「……………う……………ごほっ、げほっ……………!」

少女が喉をおさえて咳き込みながら、ついに起き上がる。

「だ、大丈夫……………!?!」

自分がやったことだというのに、俺は少女を気遣ってティッシュを何枚か取って差し出す。

「ほら、吐き出して……………!」

少女は苦しみながらティッシュを奪うように取って、口の中のものを必死に吐き出し始める。

痛々しいその様子を見て、先ほどの大きな快感はあつという間に霧散し、代わりに俺の心には途方もない重さの罪悪感が満ちる。

……………俺は、なんてことを。

改めて認識する。これは夢じゃなく、れっきとした現実だ。

原理は分からないが、ここに居る少女は本物の存在だ。

「あの……………大丈夫……………？」

少女は、あらかた異物を吐き出し終えて、顔を俯かせて膝を抱えている。

俺は初めて犯した罪に対する謝罪の言葉など、全く思いつかなかった。撃ち殺すなら、今すぐに問答無用で撃ち殺してくれ。そんなことさえ思った。

「……………」
「ありがとう……………」

だが、赤ずきんの少女はそんなことを言った。

「え……………」

予想外の言葉に、俺は哑然とする。

少女が、丸まったティッシュを俺に差し出した。

「もう、大丈夫……………変な毒、吐き出せたから……………ありがとう」

俺は自分の精子を含んだティッシュを受け取りながら、何となく彼女の思考を理解した。

まず、この少女は自分の口に入ったものが精液だと全く知らない。

そして、目の前に居たこの俺を、一刻も早く毒物を吐き出すよう指示した命の恩人だと誤解している。

「ごめんね……突然、驚かせて……」

赤ずきんの少女の方が、どういうわけか俺の言うべき台詞を先に言った。

それから涙目になった瞳を腕で拭ってから、俺を真っ直ぐに見つめて言葉を続ける。

「……ボクは、罰を受けて、ここに来たの。驚いたでしょ……?」

彼女の瞳はくりっつとして大きく可愛らしいが、どこか陰気な雰囲気醸している。

「ば、罰……？ 何の話だ……？」

「ボクは……違う世界から、飛ばされてきたの。『異世界』って、いうのかな。貴方の住んでいるこの世界とは違う、並行世界。ボクは、罪を犯して、この世界に送られた……。伝わる、かな……」

赤ずきんの少女は表情乏しく、言葉をたどたどしく繋いで俺に説明しようとしていた。

普段であれば信じられるものではないが、光と共に俺の自室に突然現れた経緯を見ているから、妄想の話だと一笑に付すことはできない。

それに……事情も聞かずに少女の口を身勝手に犯したのは俺だ。罪滅ぼしの為にも、彼女の力にならなければ。

「多分、分かったと思う。君は異世界から、この世界に転送されてきた。だから、ここに居る。そういうことか？」

「そうだよ……。良かった……。信じてくれて、ありがとう」

少女は表情をあまり変化させずに、頭だけペコリと下げる。

こうして彼女は生きて動いているが、ほとんど無表情で声も抑揚が少なく、ますます人形じみてるなど思う。

「それで……。俺は、何をすればいい？ 元の世界に帰りたいってことか？」

「……………帰れない。帰る方法はないよ」

少女は首を横に振って、俺から視線を逸らして虚空を眺める。

「これは、ボクに与えられた刑罰。異世界への流刑。帰ることなんて、できない」

「あの……聞いて良いか分からないが、刑罰って、君は、何をやったんだ……？」

すると少女は、蒼い光を宿した瞳で俺を見つめて、言った。

「——家族を、皆殺しにしたの」

空気が、すっと冷えたような気がした。

俺は視線を部屋の隅のゴミ箱へと向ける。あの中に捨てた拳銃が、再び強烈な存在感を放ち始めていた。

「……わ、分かった。嫌な事を聞いて、申し訳ない。無理に喋らなくても、構わない」
少女は不思議そうに首を傾げる。

「聞かなくて……いいの？ どうして殺したのか……みんな、いっぱい、聞いてくるのに……？」

「喋る必要は、無いよ。……家族と上手くいかないなんて、よくあることだ。俺だって……事故で亡くしたけど、両親は好きじゃなかった。それぞれ、いろいろあるもんだ。君のような子が、自分の家族を手に掛けるなんて、よっぽどのことがあったんだろ。俺は、君の方が心配だ」

本心でもあるが、実際のところ、拳銃から意識を逸らすためにひたすら喋っている気がおかしくなりそうだから出たセリフだ。

普段の俺は、こんなに饒舌じゃない。

「……そう。優しいんだね、貴方は」

そこで少女が初めて、ほんの少しだけ微笑んだ。

……俺は、優しくなんてない。

罪悪感に胸が痛むが、先ほどの自身の行為を打ち明かす勇氣は今の俺には無かった。

第二章『一緒の布団で』

「君の名前は？」

俺は台所で、電気ケトルを使って沸かしたお湯でココアを作りながら尋ねる。

「……エイリス」

振り返ってみると、赤ずきんの少女ことエイリスは、ブーツを脱いで俺の布団にくるまって顔だけを出している。

「ごめん、寒いかな？ 暖房つけようか」

「ううん、大丈夫。ボクはこうしてる方が、落ち着くだけだから……」

カップに入れたホットココアを差し出すと、エイリスは布団から這い出てきてカップを受け取った。

布団の上に正座して何度もフーフーと息を吹きかける動作が、年頃の少女っぽくて可愛らしい。

俺は側にあぐらをかいて座り、そんな彼女をしげしげと観察する。

「……………熱いのは嫌だった？」

フーフーを一向に止める気配のないエイリスを見て、俺は流石に心配になる。

「……だ、大丈夫。平気だから」

言われてエイリスは、よせばいいのにココアをズズッと一気に啜る。

「あっ……ちやい……！」

「ほらみろ、無理しないで。いま、冷やすから」

エイリスからカップを取って、冷凍庫に入っている氷をいくつか放り込む。

「これで少し待ってれば冷えて飲みやすくなるよ」

「……………ありがとう」

ほどよく冷めたココアを飲んで満足そうな顔を浮かべ、俺も嬉しくなる。

「お腹は空いてるか？ あるのはインスタントばかりだけど」

「……大丈夫。あんまりお腹は空かない方だから」

そう言ったエイリスのお腹がグルルと唸ったのを、俺は聞き逃さなかった。

俺は黙って台所に向かい、戸棚からカップラーメンを取って、電気ケトルの残りのお湯を注いだ。

「あの……もしかして何か作ってくれてるの……？ いいよ、ボク、我慢できるから……」

「無理しなくていいし、責任も感じなくていい。俺がこうしたいから、してるだけだ」

「……………んん、本当に、優しいんだね……」

三分待って、布団の側のローテーブルの上にカップラーメンと割り箸を置いた。

「カップラーメンだ。エイリスの世界には、こんなものあった？」

「もっと凄いのは、あったね。石の塊にしか見えない物を、一瞬で料理に変える装置とか」

「……そうか」

異世界転移が題材のライトノベルなら、異世界人が現代人の高度な文明に驚くシーンが定番のようにあるが、実際にはどうやら異世界により文明の程度はピンキりらしい。ライトノベルによく出てくる異世界はだいたいキリ側で、エイリスが住んでいた異世界はピン側。

「でも……うれしいよ。ただの迷惑者のボクに、ここまでしてくれるなんて。本当に、ありがとう」

箸を使い方を教えてないなど思ったが、エイリスは器用に割り箸をバチッと割って、違和感なく手に持つ。

「割り箸もエイリスの世界にあったのか？」

「似たものは。他にも、いろいろな食器があったよ……」

エイリスは喋りながら熱々のラーメンを口に含む。

「ン、あっヂッ……!!」

「……猫舌だな」

そうしてエイリスが氷を入れて強引に冷やしたラーメンを食べている間、俺は飲み干されたココアのカップを洗いながら、しみじみと考える。

何となく、今の俺は幸せだ。

異性と二人で穏やかなひと時を過ごすことが、これほど心が満ち足りるものだとは思わなかった。

できれば、こんな時間がずっと続けばいいのにと考えてしまう。

カップを洗い終え、振り返ってエイリスを見ると、彼女はあつという間にラーメンを食べ終えており、布団の中にくるまっていた。

「ねえ……」

布団にくるまったエイリスが顔だけ出して、俺を呼んだ。

「この布団、すごい寝心地いいね……ボク、気に入っちゃった。ずっと使ってもいい？」

「別にいいよ。それにしても、今のエイリス、カタツムリみたいだな」

「それって何？ 動物？」

「危険が迫ると、殻にこもる生き物。なんとなく愛嬌があって可愛いけど、危険な寄生虫がついていて……もしカタツムリに触れて寄生虫が身体に入ったら、こっちが死んじゃうんだよ。だから、絶対に触っちゃいけないんだ。生で食べるなんてものほかだね」

「へえ。こっちの世界にも、似た動物はいたかも。この部屋くらいの大きさでね」

「……デカすぎ」

そのままエイリスが住んでいた異世界の生物について話を聞いているうちに、急に睡魔が襲ってきて、俺は大きなあくびをした。

何気なしに時計へ視線を移していくと、時刻は午前三時に差し掛かろうとしていた。

……あと四時間。出勤まで、四時間。

エイリスについての今後の不安よりも、出勤の時間が刻一刻と迫っている恐怖の方が俺にとっては強い。

俺の穏やかでない心中を察したのか、エイリスが心配そうに首を傾げる。

「そういえば、今は夜だね。寝なくて大丈夫……?」

「……全然いいよ、楽しかったから、別に……」

言いながら、意識をふっと失いかける。

「布団って、他にもあるんだよね……？」

「いや。エイリスが使ってるそれだけ」

答えると、彼女は目を丸くして気まずそうに布団から頭を出す。

「知らなかった……ごめん、ボクが占拠しちゃって……」

「いいっていいって……俺は床で寝るから……」

「ううん、駄目だよ、それは……」

するとエイリスは俺を見つめながら、身体に被せていた布団を少し開きながら言う。

「——だったら……一緒に、寝よ……?」

俺の眠気は一瞬で消し飛んだ。

純朴な彼女なら他意は無いのだと思うが、彼女の何気ない上目遣いと、覗き見えるふくよかな胸の谷間が、劣情を煽ってくる。

そして、眠っていたエイリスの口内に射精した快楽の記憶が鮮明に蘇って、再び下腹部がズキリと疼いた。

「き……キミが、望むなら……」

相変わらず童貞である俺は、しどろもどろにそう返した。

試読版は以上です。続きは本編で！

俺の部屋に、
異世界から
少女が現れた。

R18
ADULT ONLY
成人向け

「ずっと一緒にいてね。…何があっても」

異世界転移ファンタジーR18純愛ノベル

著：相山タツヤ

ブラック社畜と異世界赤ずきん

R18
ADULT ONLY
成人向け

今日、
異世界の
メイドを拾った。

「わたしに任せて、ご主人様！
何も出来ないけど、がんばります！」

異世界転移ファンタジーR18純愛ノベル

著：相山タツヤ

ゆるふわメイドと機関銃

R18
ADULT ONLY
成人向け

その宿無し少女、
淫乱メンヘラ。

異世界転移ファンタジー
R18純愛ノベル

その淫魔は 雨と共に

著：相山タツヤ

「わたしも、すごく寂しいの。
一緒に、幸せになるうね……？」

助けたメイドは、
吸血鬼でした。

吸血メイドの ご奉仕性活

R18
ADULT ONLY
成人向け

「私が、貴方のメイド兼お嫁さんになってあげる……ご主人様？」

著：相山タツヤ

異世界転移ファンタジー
R18純愛ノベル

ガンスミス・アイヤマ

